労働時間の多様化と格差

水野谷武志（北海学園大学・経済学部）

はじめに

- （背景）1980 年代以降，雇用形態および就業形態の多様化（　不安定化），労働時間法制の柔軟化等のますますの促進により，労働時間の実態も多様化と同時にさまざまな格差(階層間およびその内部における格差)を生み出していることが予想されるが，その実態は十分には検討されていない。
- （先行研究）労働時間の格差としては，早くから，産業，企業規模，職種，性別等の格差について，大雑把な国際比較統計を交えてすでに指摘されたが（例えば藤本武 1963），これを継承しつつさらに発展させた統計的研究は依然として欠けている。最近では，労働力調査を使って「性別分化を伴った労働時間の二極化傾向」を森岡（1992）が指摘した。森岡の指摘を発展させるべく，性と雇用形態別の違いの動向（1992 年と 2002 年の比較）について水野谷（2005）が検討し，さらに，職業，産業，企業の従業員規模，所得別の違いについても非常に荒いが水野谷（2005b）が分析した。また，長時間正規労働者の属性的特徴（正規雇用者の中で長時間労働しているのは性，職業，産業別にみてどのような組み合わせが多いか）について水野谷（2006）が明らかにした。しかし，これらの研究によって，格差を伴いつつ多様化する労働者の労働時間における実態が明らかにされたとは言い難い。
- （報告の課題）労働時間の多様化と格差について検討する手始めとして，労働時間のより詳細な属性別統計を作成し，そこから多様化と格差について読み取りうる点を示す。具体的には，①雇用形態，性，職業のクロスから労働時間における多様化の状況を把握し，これらの属性を基礎としてさらに②年齢と所得水準をクロスさせ，各階層内の労働時間差＝格差の把握を試み，③実際に働いている労働時間の長さと希望する長さとの格差について検討する。
- （使用統計と分析期間）総務省統計局「就業構造基本調査」のミクロ統計データを主に使用し，1992，1997，2002 年調査から作成した統計表にもとづいて，1990 年代初頭のバブル経済崩壊から 1990 年代半ばの日経連報告（いわゆる「新日本的経営」）を経て社会格差が広がったと想定される 1990 年代後半以降の変化をみる。

1.　雇用形態の多様化

- 労働時間の多様化と格差を検討する前に，雇用形態の多様化について確認する
- 雇用形態（「正規の職員・従業員」，「パート・アルバイト」，「派遣社員」，「契約社員・嘱託」，「その他」）別就業者数の推移（図表は省略）
  →非正規雇用の増大，非正規雇用の多数を占める女性
- 従業上の地位（「一般常雇」，「臨時雇」，「日雇」）と雇用形態をクロスさせた就業者数の推移（図表は省略）
  →「パート・アルバイト」における「一般常雇」割合増，「派遣社員」・「契約社員・嘱託」における「臨時雇」割合増。
  →パート・アルバイト雇用の長期化（　不安定雇用の長期化），嘱託・派遣労働の短期

雇用化（　雇用の不安定増大）を示している？

2.　労働時間の多様化－雇用形態および職業別労働時間

- 雇用形態別週間就業時間の推移（図表は省略）
  →男女「正規の職員・従業員」の長時間労働者割合の増加
  →男女「パート・アルバイト」でありながらフルタイム（年間 250 日就業×週 35 時間以上労働）で働く労働者割合の固定化
- 雇用形態と職業をクロスさせた週間就業時間の推移（図表は省略）
  →性および雇用形態別による職業分布の偏りを確認しつつ，職業による労働時間の多様化について分析

3.　労働時間の格差Ⅰ－年齢，所得

- 年齢，職業別「正規の職員・従業員」の週間就業時間（図表は省略，以下同様）
- 年齢，主要職業別「パート・アルバイト」の週間就業時間
- 年齢，主要職業別「派遣社員」の週間就業時間
- 所得，職業別「正規の職員・従業員」の週間就業時間
- 所得，主要職業別「パート・アルバイト」の週間就業時間
- 所得，主要職業別「派遣社員」の週間就業時間
  →雇用形態と職業をそろえた上で, 年齢と所得水準による労働時間の格差を検討する。
  →若年男性正規雇用者の長時間労働傾向（例えば，玄田 2001，熊沢 2006）の確認
  →これまで実証研究があまり行われていない，所得と労働時間の関係について探る。同一所得水準における労働時間の差を検討する。

4.　労働時間の格差Ⅱ－現実と希望する労働時間の格差

- 雇用形態，就業時間の希望（「今のままでよい」,「増やしたい」,「減らしたい」）別週間就業時間（図表は省略）
  →長時間労働者のうちどの程度が「減らしたい」と思っているのか，それは雇用形態によって違いがあるのか検討する。

参考文献

熊沢誠（2006）『若者が働くとき：「使い捨てられ」も「燃え尽き」もせず』ミネルヴァ書房
玄田有史（2001）『仕事のなかの曖昧な不安：揺れる若年の現在』中央公論社
藤本武（1963）『労働時間』岩波書店（岩波新書青版 481）
水野谷武志（2005a）『雇用労働者の労働時間と生活時間：国際比較統計とジェンダーの視角から』pp.64-74
水野谷武志（2005b）「性と雇用形態を重視した週間就業時間分布の多重クロス分析」『研究所報』法政大学日本統計研究所 pp.63-108
水野谷武志（2006）「ジェンダー視点からみた労働・生活時間の配分構造」『社会政策学会誌』第 15 号，pp.19-32
森岡孝二（1992）「日本型企業社会と労働時間構造の二極化」『経済』No.335，pp.118-135